

日本旧石器学会

ニュースレター 第37号

NEWS LETTER No. 37

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



アジア旧石器協会(APA)への期待

—APA名誉会長就任によせて—

小野 昭 (明治大学)

設立10年を迎える

隔年開催となったアジア旧石器協会 (APA) は、来年2018年にロシアで第9回大会を迎える。2008年にアルタイで開催されたA. P. オクラドニコフ生誕100周年記念国際シンポジウムの開催期間中に、デニソワ洞窟遺跡前のキャンプ地で会を設立してから、10周年である。設立準備にそれぞれ役割を担ったA.P. デレヴィアンコ、李隆助、小野昭、高星、が順に会長を務め一巡りした。

10年一昔というが、新たな解答を与えなければならぬ問題もいくつかでてきた。日本、韓国、中国、ロシアの国内組織を単位とする設立4か国の体制を継続するか、設立時の合意文書を改訂して加盟国を拡大するか、個人加盟の希望をどうするか、開催費用、持ち回りの事務局（実際は持ち回りのLocal organizing committee）体制、ホームページの開設、若手発表賞新設の課題などである（詳細はニュースレター35号参照）。もちろん課題が多いということは、積極的にとらえれば可能性も大きいということである。

何ごとも東アジアは難しい

日本旧石器学会の渉外委員長として対応した経験から、設立に至る経緯を振り返ると、設立4か国間の合意形成は、ことのほか難しい。考古学研究を支えている枠組み、様々な学問分野全体を統合している体制の仕組みなどがそれぞれ独特なあり方をしているからであろう。大きな違いがあるからこそ、国際組織を立ち上げた意味があるのではないかと、言われればまさにそのとおりであるのだが。最初はなんだかよくわからなかった点も、大会の回数を重ねるにしたがって、相互に違いを認識できる共通点をもてるようになった。それが現段階だろう。

「私の経験によれば」という言い回しは「私の失

敗によれば」とほとんど同義であるが、あえて言えば、ボトムアップのシステムがどの程度あるのかが、交渉におけるさまざまな困難の根であり、またそれを理解する鍵であったように思う。会員組織とし個々の会員から会費を徴収し、その中で組織を運営するのと、トップダウンで様々なことが基本的に決まるシステムとでは、行って帰るほど違う。違うシステムを所与の前提とした荷物を背負ってお互いに交渉するのであるから、スムーズにいかないのは当然である。アジア旧石器協会Asian Palaeolithic Associationの名称を決めるだけで2年もかかったのもこれと無関係ではない。「東アジアという地域限定はダメだ」「国際という用語を冠するのは止めてくれ」「コンGRESの名称も忌避したい」「加盟に際して設立4か国は拒否権を持つよう明記すべきだ」などは、もめた事柄であった。名称として最も単純なAPAの背後には様々なプロセスが隠されている。



アジア旧石器協会設立合意文書への署名を記念して—2007年12月6日ノヴォシビルスク市のロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌研究所前で。左からLee Hyeong Woo教授（韓国）、小野、A. P. Derevianko所長（ロシア）、高星教授（中国）

APAに期待する

もはや先頭に立って旗振りの実践をする立場にならない者が、やたらに「かくあるべき」を語るのは無責任であろう。だから、以下にささやかな期待を少し記すにとどめたい。

1. 焦らずに進めてもらいたい

APAの組織問題である。アジア旧石器協会の組織上の特徴（同時に困難な）点は、固定した事務局がないことにある。ただしこれは欠陥ではなく特徴である。設立4か国でそれぞれの組織の組織原則や位置づけが異なっているので、隔年で持ち回る以外に方法はない。いま力があるからと言って、設立4か国のどこかに事務局を固定することはできないし、してはならない。4か国が相互にいかなるピラミッド構造をも許すことなく、フラットな関係を維持するには隔年ごとに開催地実行委員会Local Organizing Committee的な機能をもって進めるしかないというのが私見である。この枠内で会の組織拡大問題も議論すべきである。つまり拡大するといってもおのずと限界がある。ホームページの開設一つとっても容易でない。ネット上の制約も国によってはある。大会時にはあれもこれもと盛り上がっても、散会すればその意識を日常的に維持するのは容易でない。執行委員会内の議論はおそらく2年に1回、ないし特別に招集して1年に1回であろう。電子メールでは事務連絡がYes or Noの送受信ができて、議論はできない。

設立準備を始めてから毎年、何がしかの議論をしているのに5年以上も経過しているので、今度こそなんとかしなければと4か国の代表は切迫した気持ちで詰めの会議を2007年12月にシベリアのノヴォシビルスク市で開いた。それに向け日本側は、日本旧石器学会設立当初から国際組織立ち上げに際してのガイドラインを用意していた。私が全部英訳して、韓国、中国、ロシアの代表に事前配布し、日本旧石器学会ではどのように考え、準備しているかを伝えておいた。デレヴィアンコ氏はそれをさらにロシア語に訳したテキストをもとに、日本案の通りに項目を追って進め、4か国代表で議論したのである。したがって、『旧石器研究』第4号（2008年）の渉外委員会報告に掲載した合意文書のコピーASIAN PALAEOLITHIC ASSOCIATION Organizational meeting, Novosibirsk, Russia, December 6, 2007 Agreementには、第8条の「拒否権」以外は、基本的に日本旧石器学会案が生きているのである。

これからのさまざまな課題についてはより良いプロセスの案があれば別であるが、今後事前に日本側

から案を提起しておくのも一つの進め方かもしれない。焦らずに主体的に進めてもらいたいと期待する。

2. 「こういうもの」作れないかな？

「こういうもの」とは、旧石器関係用語の対応表のことである。国際組織が2008年に設立されて間もないころ、近い将来、旧石器関係の各国語対応の辞書の作成は無理だろうから、せめて日本語－朝鮮語－中国語－ロシア語－英語の用語対応表くらいは作れるのではないかと個人的に妄想していた。用語数200～300くらいを考えた。用語の定義ではなく対照関係を明確にするだけである。組織が誕生し、毎年開催された大会の準備や運営などを体験してみると、「これはとても無理だな」の思いに駆られ、文字通り妄想であったと反省し、問題提起もあきらめた。余計な苦労をせずに、英語でいいではないかという意見も強いだろう。しかしそれぞれの母語でなんと表現しているのかを知ることは英語を媒介としてでも重要であると思う。それぞれが英語との対応を作って、その結果をそのまま4つの異なる母語どうしを並べれば完成するわけではもちろんない。こうした対应用語集の優れた前例は、チュービンゲンのLinda R. Owen氏長年の苦心になる、英語－ドイツ語、ドイツ語－フランス語、フランス語－英語、の先史考古学の用語集（タイトルは辞書となっている）3巻がある。1990年代の後半にMo Vince出版社から刊行されている。それぞれ約10,000の用語・単語が収録されている。旧石器に限定しても300くらいなら考えたが、4か国で組織的に取り組むとなると簡単ではないだろう。これは中・長期的な期待として取っておきたい。もっとも私がそれを使う日があるかどうかは分からないが。

3. 回転は、はい

清少納言のことばに、「ただ過ぎに過ぎるもの帆かけたる舟。人の齢。春、夏、秋、冬。」がある。国内組織であろうと国際組織であろうと、動かすのは具体的なひとである。

次回のAPA日本開催は7年後の2024年である。例えばいま大学院博士課程で27歳の院生を仮定すると、次の日本開催の時には30代半ばで若手として研究の上で最もエネルギーに満ちて働き盛りである。

このあたりの世代の層をいま厚くしておかないと先行き苦戦を強いられることになる。大小の国際シンポジウムや国際ワークショップにおける研究発表だけでなく、国際会議での組織的支援活動や事務局会議などへも積極的に頭を突っ込むようにすることが必要である。任意団体の一員として出席してい

も、会議では大げさに言えば、厚いか薄いかは別にして国家の鎧をかぶせられて議論しなければならない状況に直面することがある。いわば己の「存在」と、相手からみなされている「当為」の間の乖離を自己認識するいい機会である、と同時にいやな機会でもある。

学会発表や研究業績の出し方も21世紀に入った初めのころとは一変したように思う。自然系では常識であったあり方が旧石器研究をめぐる学会状況にも押し寄せてきている。国内外で大学院生や若手の発表の機会は多様に展開しているので放任すればいいように考える人もいるかもしれない。しかし、アジア旧石器協会をターゲットに戦略的に取り組むことが重要だと私は思う。大学院生や若手の可能性を信頼して、2024年には第12回大会を日本で迎えたいものである。

2016 年度日本旧石器学会賞 受賞者報告

ニュースレター36号で報告しましたとおり、2016年度日本旧石器学会賞を山原敏朗会員（帯広百年記念館）、奨励賞を佐野勝宏会員（早稲田大学高等研究所）、長井謙治会員（東北芸術工科大学）が受賞されました。「日本旧石器学会賞選考委員会による選考理由」、および、「受賞者の言葉」を報告いたします。

2016年度学会賞

山原敏朗会員（帯広百年記念館）

選考理由

学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員に授与する。学会員からの推薦に基づき、当委員会は山原敏朗会員を2016年度の学会賞受賞候補者として選考した。山原氏は、北海道十勝平野を中心とした旧石器時代の地域研究に精力的に取り組んでいる。地域研究は充実した資料のもと継続的に多層・複眼的に研究を蓄積できて成立するが、それは正に氏によって細石刃石器群期を中心に旧石器時代前半期から縄文時代草創期まで幅広く実践してきたところである。特に、「彫器の形態・技術・機能」（『先史考古学論集』第6集、1997年）に見られるように、石器の形態の観察、技術の分析とともに使用痕観察による機能の分析を行い、総合的に旧石器時代・文化における石器の持つ意味・背景を研究するスタイルは、編年主体の旧石器研究からの脱却に貢献したものと言える。近年では、北海道を超えて北方



写真1 山原会員授賞風景

地域全般を対象とした論考も認められる。また『北海道旧石器文化研究』の編集委員を務めるなど北海道における学界の発展に寄与してきた。以上の業績は学会賞に相応しいと考える。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健）

受賞の言葉（山原敏朗）

この度は、たいへん荣誉ある賞をいただき、誠にありがとうございました。このような形で皆様にご挨拶することになるとは夢だにしていまませんでしたので、身に余る光栄というほかはありません。

大学時代、広島にいた私は、ふとしたきっかけから札幌で職を得ることになりました。その1年目に泉町A遺跡の発掘調査に参加させていただき、2年目には共栄3遺跡の発掘調査に従事することになる等、北海道の旧石器時代資料に触れる機会を十勝の地で最初に得ることができました。それが縁で、数年後帯広に移ることになったのです。

初年度に担当した南町1・2遺跡の発掘調査では、異なる複数の石器群が出土しましたが、それらを短期間で整理する過程は、知識や経験に未だ乏しかった私にとって貴重な研鑽の機会となりました。その後も旧石器時代遺跡の発掘調査が帯広市や近隣の町村でしばらくの間続き、それらに直接・間接的に関わることができました。今にしてみれば、本当にかげがえのない時間をいただいたように思います。2003年には大正3遺跡で草創期資料を取り上げる幸運にも恵まれましたが、この頃になってようやく考古学や地域社会に何かしらの貢献が自分にもできるかもしれないという気持ちを抱けるようになりました。

私のこれまで研究は、先達の卓見的な指摘に、自らの観察で得た知見を踏まえることで、いくばくかの肉付けをしたものと理解しています。ただ、手をつけていない課題も未だにありますので、少しでもそれらに取り組めるよう努める所存です。

私が渡道してすでに四半世紀あまりが経ちました

が、この間、北海道の旧石器時代研究の進展は著しく、研究自体に厚みも感じられるようになってきました。当然ながら、それは北海道の当該研究に関わった多くの方々の成果の蓄積によるものであり、私がしてきたこともその一部にすぎません。今回の賞はある意味、近年の北海道の当該研究に対するものでもあり、また、それを担った方々に成り代わっていただいたものでもあると私自身は認識しています。最後になりましたが、これらの方々にあらためて謝意を申し上げます。

2016年度奨励賞

奨励賞は、研究者の育成と研究の奨励を目的として、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に優れた業績を発表した会員に授与する。会誌「旧石器研究」他に論文等が掲載された若手研究者を中心に選考した。

佐野勝宏会員（早稲田大学高等研究所）

選考理由

近年ホモ・サピエンスの特性としての複合的投射技術に注目し狩猟具の機能の研究に取り組んでいる佐野氏は「彫器再考：彫刀面打撃の役割に関する機能論的検討」（旧石器研究第7号）では、ドイツゲナスドルフ遺跡等の彫器、彫刀面を持つ複合石器等の使用痕を分析し、その機能を明らかにした。彫器は世界各地で出土する器種でありその機能は汎世界的に捕捉されなければならない。佐野氏は、内外の先行研究に裏打ちされた精緻な成果と研究法を背景に、各部位単位の機能を詳細に明らかにし、彫刀面を持つ意義を汎用的に捉えることに成功した。研究方法の明確性とテーマの発展性は、奨励賞の趣旨と合致するものである。

（日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健）

受賞の言葉（佐野勝宏）

この度は、日本旧石器学会奨励賞をいただき、大変



写真2 佐野会員授賞風景

光栄に思います。受賞論文「彫器再考：彫刀面打撃の役割に関する機能論的検討」は、ドイツ・ケルン大学原史先史学研究所に提出した学位論文の一部をまとめたものです。ドイツ留学に切り、様々な面でお世話になった小野昭教授にまずは感謝申し上げます。ドイツ留学を決めたのは、小野昭教授のゲナスドルフ遺跡の翻訳本とレビュー論文、受講した授業がきっかけとなりました。留学先のケルン大学、そしてゲナスドルフの資料分析をしていたモンレポー博物館には、世界中から研究者が集まり、常に先端研究に触れ続ける刺激を受けることができました。また、使用痕分析のトレーニングは、御堂島正教授にご指導いただきました。お忙しい中時間を割いてくださった御堂島教授に、改めて感謝申し上げます。

受賞論文では、ヨーロッパのマグダレニアン期3遺跡の彫器の使用痕分析の結果を紹介しました。彫器は、彫刀面打撃によって形成された彫刀面の存在によって定義されますが、ヨーロッパの使用痕研究者の間では、彫刀面打撃は機能刃部の作出のためだけでなく、小石刃の作製や、摩耗した刃部の再生、着柄のための変形等も担っていると指摘されていました。実際、分析を進めると、機能部位と想定される彫刀面や彫器先端部は、使用痕の検出率がそれほど高くないことがわかりました。ただ、部位ごとの機能を検討すると、彫刀面や彫器先端部と骨角象牙加工とは全く無関係ではなく、他の器種や彫器の他の部位に比べると、骨角象牙加工の比率が相対的に高いこともわかりました。つまり、彫刀面打撃と呼ばれる剥離技術は、機能刃部をつくることだけを目的としているわけではないものの、鈍角な縁辺と丈夫な先端部を一撃で作出できるため、骨角象牙等の固い対象物を加工する際に好んで使われた技術であるという見通しを持ちました。

現在は、狩猟具の投射方法に関する研究を進めています。実験研究は、一長一短にはいかなることが多く、出来ることの限界を感じることもあります。また、ミクロ痕跡に埋没すると、全体の方向性を見失いがちになってしまいます。本受賞を励みに、少しずつ実験研究を積み重ね、建設的な研究を進めていきたいと思っています。

長井謙治会員（東北芸術工科大学）

選考理由

一貫して石器復元製作実験による技術研究に取り組んできた長井氏は「『前・中期旧石器』時代の石器製作技術—所謂「鈍角剥離」の再検討から—」

(旧石器研究第7号)において、日本列島の後期旧石器時代初頭を溯るとされる石器群について、「鈍角剥離」に注目、検討を加え、それが同時代の組織的な技術特性であることを明らかにした。これは、評価が定まっていない「前・中期旧石器」時代の石器の存否について、その判断の研究に有効な一石を投じるものとなった。一方「朝鮮半島における過去5万年の石器群変遷—年代精査に基づく編年的考察—」(旧石器研究第12号)では、朝鮮半島、後期旧石器時代とそれを溯る石器群について、その14C年代測定値の精査を通じて評価できる資料を選定することで、石器群の変遷案を示した。朝鮮半島の編年は、様々な方法で異なる多くの案が示されてきた。氏はそれを方法の高精度化によって解決しようとし、その成果は評価を得るものである。これらの研究の成果は今後の発展性が期待されるものであり、奨励賞に相応しいと考える。

(日本旧石器学会賞選考委員会委員長 伊藤 健)

受賞の言葉 (長井謙治)

このたびは学会奨励賞をいただきまして、ありがとうございます。私は愛媛県生まれですが、小学6年生のときに遠足で土器片を拾って、考古学という世界に興味をもち現在に至ります。大学は、立命館大学文学部に進学して、当時は関西の石器研究者と同志社大学の先輩方から石器の実測や研究法を色々と学びました。当時むさぼり読んだ本の中で、「無文字社会の考古学」(六興出版)や「考古学を考える」(雄山閣)は大変印象深く、そこに更なる考古学の深みを感じたのを覚えています。それから、「石器は人を語れるか?」を私のテーマとして、その手法開発を目指して東京大学大学院に進みました。佐藤宏之先生や安斎正人先生、西秋良宏先生という私にとって眩しく、憧れの先生から、それぞれ厳しいお言葉を頂くことができた12年の日々は、私にとって戦いであり、興奮の日々でした。そして何より、関東の先達が積み上げた圧倒的な研究の「知」に驚くと共に、その理解をまずは目指しました。相模野の縄文草創期で修士論文を書いて、博士課程では、よりリアルな考古学をめざして、単身海外渡航を繰り返しました。石器を見る目を養うために、石器製作のスキルを磨こうと考えたのです。そんな遠回りな手法は研究経済の上から無駄だから止めた方がいい、という声も聞かれましたが、それでも信念を通して、これまで続けてきて良かったと思っています。博士号取得後は、こうした経験を純粋考古学に活かす手法の開拓を目指して研究はシフトしています。現在は、縁あって山形の清閑な山裾

に佇む東北芸術工科大学に勤務しています。東北の学生に囲まれて、東北という旧石器・縄文遺跡豊かな大地にフロンティアを感じながら、現場第一主義の考古学を实践すべく、日々に奮闘しています。そんな中での今回の受賞は、私にとって大きな励みになりました。奢ることなく、これからも虚心坦懐に歩んでまいります。どうもありがとうございました。



写真3 長井会員授賞風景

役員選挙について

2017年12月28日

会員各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 麻生 順司

日本旧石器学会の役員選挙告示

日本旧石器学会会則6・7条および役員・会計監査委員・顧問選出規定により、下記のとおり、役員選挙を実施いたします。

記

1. 立候補者・候補者推薦の受付

立候補者および候補者推薦は、別記作成方法により、2018年2月5日(月)までに日本旧石器学会選挙管理委員会(〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 歴史・考古学分野 日本旧石器学会事務局)に届け出てください。その折に公報に掲載する原稿は100字以内です。

2. 選挙公報・投票用紙

2018年2月中・下旬に発送します。

3. 投票期間

2018年3月1日(木)～3月20日(火)

4. 役員の決定

投票の結果、得票数の上位22位までを役員とします。ただし北海道、東北、関東、中部、近畿、中四国、九州・沖縄7地区の上位得票者から役員1名を選出し、他15名を上位得票者数によって役員とします。辞退者がいる場合は順次繰り上げとなります。

5. 被選挙権のない会員

現役員22名は全員改選の対象になります。以下の会員を除く全会員に被選挙権があります。被選挙権がない会員は、出穂雅実、氏家敏之、及川 穰、佐藤宏之、沢田 敦、鈴木美保、野口 淳、森先一貴です。

2017年12月28日

立候補者・推薦者各位

日本旧石器学会選挙管理委員会
委員長 麻生 順司

日本旧石器学会の役員選挙にかかわる公報の
原稿作成について（依頼）

役員選挙立候補・推薦にかかわる公報の原稿については、下記により作成方お願いいたします。

記

1. 原稿作成方法

A4判横書きのペン書き、またはワープロ原稿（A4、10.5ポイント、横書き、ワード他）。なお、ペン書きの原稿はワープロ原稿に直して掲載します。

1. 推薦候補

①候補者名、②推薦内容、③推薦者氏名

2. 立候補

①立候補者名、②自薦内容

②の内容は100字以内でお願いします。

2. 送付方法

下記に郵送してください。推薦候補の場合は、本人の承諾を示すサインまたは押印、推薦者のサインまたは押印が必要です。また、立候補の場合は電子メールに添付して送付しても構いません。

3. 原稿締切

2018年2月5日（月）

送付先

〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部人文・社会系

歴史・考古学分野 日本旧石器学会事務局

電子メールアドレス jim@palaeolithic.jp

日本旧石器学会役員選挙日程（案）

2017年

12月 選挙告示

2018年

2月5日（月）立候補・候補者推薦の締め切り

2月中・下旬 選挙公報及び投票用紙送付

3月1日（木）～3月20日（火）

選挙期間（3月20日消印まで有効）

3月下旬もしくは4月上旬

選挙管理委員会による開票

5月 ニュースレターにて選挙結果報告

6月 総会にて選挙管理委員長報告

2018年度 総会・研究発表・ポスターセッション発表の募集

平成30年6月23・24日に早稲田大学戸山キャンパスにて第16回総会・研究発表・ポスターセッションを開催します。ついては、一般研究発表及びポスター発表を募集しますので奮ってご応募ください。詳細は近日中に日本旧石器学会HPにて掲示予定です。

また、同日程にて、シンポジウム「日本列島への人類拡散と後期旧石器時代の成立を考える」（仮）を開催しますので、併せてご参加くださいますようお願いいたします。

2017年度普及講演会案内

2017年度の普及講演会を以下のとおり新潟市と共催で開催します。会員の皆様もご参加いただけますので、ご案内いたします。

1. 日時 2018年2月24日（土）13:00～15:30

2. 会場 新潟市歴史博物館みなとびあセミナー室

3. 内容

講演 須藤隆司「北関東地方の旧石器文化」

佐藤雅一「新潟県域の旧石器文化」

鼎談 「旧石器時代の新潟と関東—旧石器人は脊梁山脈を越えたか—」

須藤隆司、佐藤雅一、沢田 敦（兼司会）

★事前申し込みは不要です。

問い合わせ先

沢田 敦

電子メール：a-sawada@mti.biglobe.ne.jp

携帯：090-9001-0488

関連学会情報

2018 長野県旧石器研究交流会・シンポジウム 開催案内

唐沢B遺跡発掘50周年、神子柴遺跡発掘60周年記念シンポジウム「神子柴系石器群とは何か」と長野県旧石器研究交流会研究発表、データベース・ワークショップが開催されます。ご参加ください。

1. 日 時

2018年 2月3日(土) 午後1時～午後5時

2月4日(日) 午前9時～午後3時

2. 場 所

浅間縄文ミュージアムあつもりホール

(長野県北佐久郡御代田町)

3. 参 加

自由参加(申込み不要)。参加費として2000円(資料代含む)が必要です。

ただしデータベース・ワークショップと懇親会は浅間縄文ミュージアムまで、メールで申込みをお願いします。

4. 日 程

2月3日(土)

◎データベース・ワークショップ

午前10時～午後12時45分

★講師：野口淳(日本旧石器学会データベース委員長)

★お申込み：20名 参加費：ランチ代500円

★申込み締切 1月10日(水)

◎講演会 午後1時～午後2時

「神子柴石器群とは何か」 稲田孝司(岡山大学名誉教授)

◎長野県旧石器研究交流会 一般研究発表

午後2時30分～午後5時30分(発表各30分)

1 中部高地における後期旧石器時代の展開

長崎治(川上村教育委員会)

2 中部高地の後期旧石器時代遺跡—データベースからみた立地と分布—

野口淳(東京大学総合研究博物館)

3 男女倉遺跡群の使用痕分析

村田弘之(長和町黒耀石体験ミュージアム/明治大学黒耀石研究センター)

4 男女倉遺跡群分析の新視点—第I・III遺跡の再整理から—

須藤隆司(明治大学黒耀石研究センター)

◎懇親会 明治屋旅館 PM6:00～(会費5000円)

★申込み締切 1月20日(土)

2月4日(日)

◎シンポジウム「神子柴系石器群とは何か」

基調報告(発表各30分) 午前9時～午後12時30分

5 最終氷期末の両面加工刺突具の変遷について

橋詰潤(明治大学黒耀石研究センター)

6 バイフェイスを携えて

堤隆(浅間縄文ミュージアム/明治大学黒耀石研究センター)

7 先土器時代終末期における石材利用変化

—細石器・神子柴系石器群を中心に—

大竹憲昭(長野県立歴史館)

8 神子柴型石斧の特質とその意義

橋本勝雄(千葉県教育振興財団)

9 石斧への眼差し

長崎潤一(早稲田大学文学学術院)

10 パネルディスカッション 午後1時30分～3時

11 ポスターセッション 3日(土)・4日(日)

コアタイム(発表者立会質疑時間)

4日(日) 午後12時40分～13時20分

問い合わせ先

浅間縄文ミュージアム 担当 堤 隆

〒389-0207

長野県北佐久郡御代田町馬瀬口1901-1

TEL 0267-32-8922

Eメール jomon@mx2.avis.ne.jp

WEBサイト <http://w2.avis.ne.jp/~jomon/>

第43回 九州旧石器文化研究会開催案内

第43回研究会を、下記のとおり行います。詳細は追ってHP等でお知らせします。

1 期 日 平成30年3月17日(土)～3月18日(日)

2 会 場 鹿児島県立埋蔵文化財センター

3 テーマ 縄文時代開始期の土器群と石器群

—移行期の地域動態を探る—

問い合わせ先

<http://hakatanntoropusu.com/kyuusyuyukyusekkipage.html>

電子メール: kyuushukyusekki43@gmail.com

お知らせ

2017年度学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、2017年度の学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し、優れた業績をあげた会員を推薦してく

ださい。

1. 推薦内容：学会賞受賞候補
2. 推薦期間：2017 年10 月15 日（日）～ 2018 年2月15 日（木）（必着）
3. 推薦者の資格：日本旧石器学会会員
4. 推薦方法
 - ・学会賞受賞候補の氏名、推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局宛に送付してください。
5. 注意事項
 - ・推薦は自薦、他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
 - ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限りません。
 - ・推薦にあたって、学会賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
 - ・推薦の書式は自由です。
 - ・推薦理由は概ね100 字から300 字にまとめてください。

6. 応募先・紹介先

日本旧石器学会事務局

（担当：鈴木美保・岩瀬 彬）

〒192-0364 東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部人文・社会系歴史・考古学分野

電子メール jimmu @ palaeolithic.jp

日本旧石器学会研究グループの募集

日本旧石器学会では、旧石器考古学およびこれに関連する研究課題について国内・国外の情報を交換し研究することを目的として、研究グループを設置しています。その「日本旧石器学会研究グループ規定」には自由に研究を行うことができる上、運営費を補助することも盛り込まれております。

つきましては2018年度の日本旧石器学会研究グループを募集します。研究グループの発足を希望する会員は、グループ名、代表者名、連絡先、研究目的、活動予定期間、参加者数、運営費交付希望の有無などを記入して本学会事務局に応募してください。募集期間は2018年3月31日（土）まで。応募・問い合わせ先は、日本旧石器学会事務局へ電子メールまたは郵送でお願いします。

メーリングリストの運用について

メーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報

交換の場として活用していくために設けたものです。ただ、運用から2 年以上がたちましたがまだ会員の約3 割の方にしか登録いただけていません。まだ登録していない会員諸氏におかれましてはメーリングリストにご登録ください。メールアドレスを、事務局のメールアドレス（jimu@palaeolithic.jp）までお知らせください。速やかにご利用できるようにします。強制するものではありませんが、ご協力をお願い申し上げます。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただいています。**2017年度以前の会費を未納の方につきましては会費納入状況を同封いたしましたので、未納金額を御確認いただき、速やかな納入をお願い申し上げます。**振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180 - 8 - 408055 です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

なお前号でお知らせしましたとおり、**2018 年度より年会費が6,000 円になります。**会員各位のご理解をよろしくお願いいたします。

また、転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード（<http://palaeolithic.jp/join.htm>）し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第37号

2017年12月28日発行

編集: 日本旧石器学会ニュースレター委員会

氏家敏之・橋詰 潤・馬籠亮道

発行: 日本旧石器学会

事務局: 〒192-0364

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部

人文・社会系 歴史・考古学分野

E-mail jimmu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>